

パネル発表「学校飼育動物を活用した実践報告」

八木 良子



1 はじめに

多くの学校の飼育動物は、実際に授業に活用されているのだろうかという疑問に思うことがあります。飼育担当の教員と飼育委員の児童のえさやりと飼育舎の掃除の活動だけで終わっているところも多いのではないのでしょうか。

私は、学校飼育動物について考えるとき、2005 年に東京で起こったユキノスケ事件のことがまず思い出されます。全国学校飼育動物研究会を立ち上げられた中川美穂子先生が生前、紹介してくださった事件です。

2005 年 5 月 8 日深夜に少年数人が小学校の飼育小屋からウサギを連れ出し、すり鉢状になったローラースケート場でサッカーボールのように蹴り死なせてしまったというなんとも痛ましい事件です。しかし、その数

人の中に一人だけ「やめてくれ」と訴え続けた少年がいたそうです。その少年は、小学校の時に飼育委員会に所属し、飼育委員としてウサギの世話を経験していたといえます。

学校飼育動物は、その「生・生まれる、生きる」「老・老いる」「病・病む」「死・死ぬ」という命の営みを人のそれよりは短いスパンで児童生徒に見せてくれます。その営みに児童生徒が寄り添うことができれば、その体験は精神的成長に大変有効であろうと考えられます。

教材として命あるものを活用することは、難しい面や解決しないといけない問題がたくさんありますが、その労をしてあまりある利点があると考えます。

私が行ってきた 1，2 年生の生活科，4，5，6 年生の理科などで学校飼育動物を活用した授業について、また、今まで避けてとおりがちだった飼育動物の「老」「病」「死」についても期せずして遭遇したときのことについて、委員会活動を中心に取り組んだ実践について報告したいと思います。

2 授業での活用

(1) 1，2 年生の生活科等

学校探検で飼育舎をのぞいてから、ウサギやチャボに関心を持ち、子どもたちは、毎日のぞきにいくようになりました。飼育担当の私や飼育委員会の上級生が朝、中休み、昼休み、放課後と世話をする様子を見て、自分たちも係りをしたいと言い出し、私の担任するクラスには「しいくがかり」ができました。

授業では、観察する→えさをやる→なでる

→抱っこする
→ウサギの
心音を聴く等
の活動をし、動
物の重さ、ぬく
もり、心音など
五感をフルに
使って得た感
想を記録する
ことを続けま
した。



ウサギを抱いて笑顔

できないことなどに気づくことができたと思
います。



紙芝居「学校にやってきたウサギ」



教室内で心音を聴く活動



ロールプレイでウサギの気持ちを考える

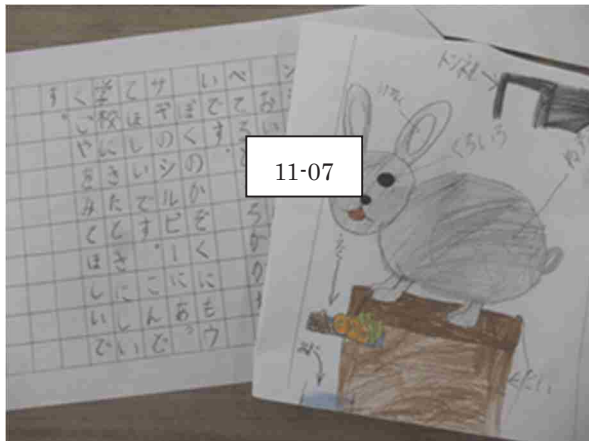


飼育者の前で観察

また、児童に飼育される「ウサギ」の立場
で考えさせるように作られた獣医さん自作
の紙芝居を見せ、児童にロールプレイをさせ
ることによって、ウサギも人と同じように、
快不快を感じたり、空腹になったりすること、
人と違ってそれを言葉で人に伝えることが

そのほかの教科でも、学校飼育動物を活用
した授業をすることができました。国語の
「よく見てかこう」「しらせたいな、見せたい
な」では飼育舎のウサギやチャボを観察し
メモを作り作文に表すという取り組みをし
ました。図工「せんせい、あのね」では、「学
校のどうぶつとわたし」を描きました。

2年生でも引き続き、観察などの時間をと
ったり、ふれあいタイム（休み時間の委員会
の活動）などで飼育動物にふれあったりする
活動を続けました。児童は当初の「ぬいぐる
みのようなかわいいウサギ」「触りたい、だ
っこしたい」という感想から「人間が世話を
しないと生きていけない生き物であるウサ
ギやチャボ」「人間と同じようにおなかがす
いたり、寒い暑いを感じたりする生き物」「ず



作文のための取材メモ(1年)



学校飼育動物のスケッチ(1年)

っとお世話をしたい」と、感想が変わってきました。

飼育動物を活用することによって「他者とのかわり」や「生命の大切さ」に気づくきっかけとなったと思います。

3 4, 5, 6年生の理科等

「季節と生き物」(4年)「生命のつながり」(5年)「体のつくりとはたらき」(6年)の各単元で学校飼育動物とのふれあい、観察する機会を積極的に設けました。

どの学年でもウサギやチャボに実際に触れ合うことによって関心を持ち、観察する様子も真剣そのもので記録の絵も写実的になり、表現力が高まってきました。

6年生43名中、30名が6年生になるま



命のぬくもりを感じて



理科「ヒトの体のつくりとはたらき」

でに学校飼育動物を観察はしたが実際抱っこするなどの経験がなく、半数の20名の児童は家庭などでの生き物の飼育経験(犬, 猫, 亀, 魚, 昆虫などを含む)が無いと答えました。そんな中での学校飼育動物の授業での活用は児童にも保護者にも好評でした。児童の感想や写真を載せた観察カードを授業参観や保護者会を利用して保護者に見てもらったところ、「住環境の制約で小動物を飼育する経験がないので、学校で触れ合う体験ができるのは良い」「いのちってあったかいと感じたなど具体的な感想を子どもが記録しているのを見るとうれしい」「単発的な行事ではなく本人が希望すればいつでも飼育舎に小動物がいるというのがいい」等の感想が寄せられました。



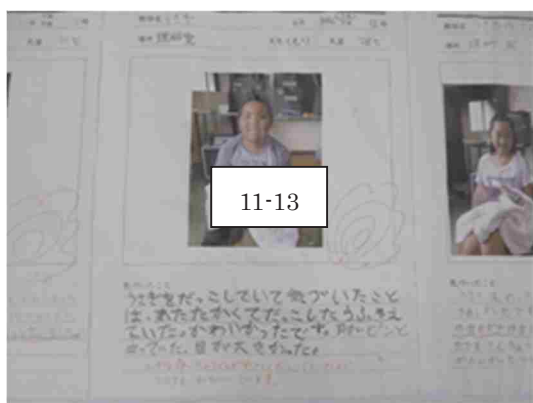
チャボとの近さを感じさせる作品



保護者会などで掲示



チャボについて



児童の観察カード（5年）

4 飼育委員会活動を中心とした活用

「先生、ぼくは、ウサギのココアが白内障なので危なくないように過ごさせてやりたいです。」と飼育委員会を希望した動機を初

顔合わせの時に言った児童は、委員長になり、先頭にたって飼育舎の清掃、えさやり、動物たちの運動をさせてくれました。また、天気がいい日は「今日は、〇年生と〇年生のふれあいタイムをします。」と昼休みのことを給食時間に校内放送で呼びかけました。うさぎを遊ばせる囲いで仕切られた「ふれあいランド」や飼育舎の中に人数と時間を制限しながら参加者を入れてやっていました。時には、「ウサギにストレスががかり過ぎるので見るだけにしてください。」とか「チャボは、砂あびがお風呂のかわりなんだよ。」と指示や説明をしていました。高学年の児童が、飼育動物と遊びたい、飼育動物がかわいいといった気持ちだけでなく、いつしか飼育動物の立場にたって考えて世話をしている様子が見られるようになりました。

「生」について計画的に活用できるのが、各学年の授業であるとするならば、「老」「病」「死」については、日常飼育動物に接している飼育委員会を中心にすすめることとなります。

(1) 「老」について

「かわいい」という感情だけでなく、それぞれの飼育動物の年齢や性別、時には性格までを考えて児童は世話をするようになります。

「寒さ」については、年をとったウサギに

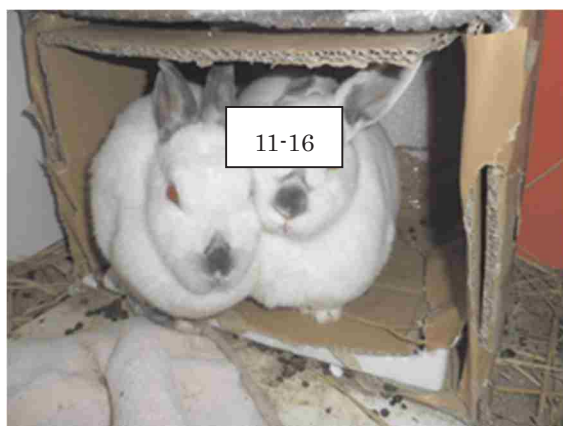
関して飼育小屋の中に小さな居住用の箱を作って防寒に工夫をしたり、全校に毛布やシーツの提供を呼びかけたり、小屋の周りに防寒シートを張ったりする作業にも積極的に関わったりしてくれました。また、老いたウサギについては特に相性のよいウサギを、一緒に過ごさせるようにした。お互い温めあってウサギ同士仲良くしている様子を見て、児童も影響を強く受けていたようです。

(2) 「病」について

福岡市は市の獣医師会の協力で、ある程度の傷病については無料で診察・治療を受けることができます。なかなか児童を病院に同行させることはできませんが、診察や治療の様子について話すことにしています。それによって自分たちができることを考えて取り組んだり、教員の手伝いを率先してするようになりました。



老ウサギの相性の良い3羽



寒い日身を寄せ合って



老いて寝たきりになったウサギの世話



冬場の風呂入れ

(3) 「死」について

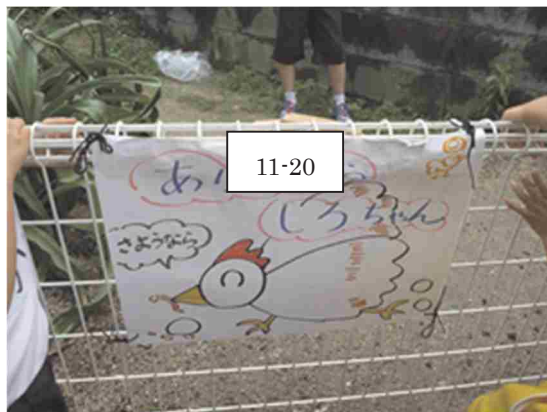
以前は、学校飼育動物が死ぬと児童の目に触れる前に死体を埋葬したり、処理を業者をお願いしていましたが、「死」についてもきちんとその事実を提示し一緒に「死」を感じることが必要ではないかと考えるようになりました。「死」はある程度それぞれの動物の健康状態により予想はされるものの時期などを前もって知り、授業の計画を立てることはできません。「死」に接した場合は委員会が中心になってお別れの会をしたり、思い出コーナーなどを作ったりすることが有効だと考えられます。

本校では、2学期のある日、チャボのしろが突然死にました。学校の敷地内に埋葬することはできませんが、中休みにお別れをさせ、業者に後を託しました。



11-19

死んだしろちゃんを花で飾って



11-20

お別れの会をふれあいランドで

口伝えにしろの死を聞き、本校は、300 人くらいの学校ですが、100 人ほどがお別れにきました。

そして、その翌日には別のチャボが卵を産むという場面に児童は遭遇しました。「命」がつながっていると感じ、日記に書いている一年生もいました。

「生」「老」「病」「死」をそばで見せてくれるのも学校飼育動物の利点と考えます。飼育委員は「ふれあいタイムが老齢のしろの負担になったのではないか。」「ストレスを与えすぎるようならふれあいタイムを減らそうか」と、このあとも動物の立場にたって話し合う姿がみられました。

おわりに

学校飼育動物を授業や特別活動に積極的に活用することによって、教員も上級生も学校飼育動物に関心を持ってかわわり、世話を



11-21

飼育委員が寄り添って

するようになります。飼育動物の世話をする様子を見たり、実際に手伝ったりすることによって生き物をいつくしむことの大切さを知った児童たちは、「命を大切にすること」を主体的に学んでいるであろうと思います。

その効果を数値で表すことはできませんが、彼等の表情や、記録や感想を書いた表現物、生き物に対する興味関心や思いやりの態度などから、学校飼育動物を介在させた教育は有効であると確信します。また何より飼育



11-22

氏の翌日 別のチャボが卵を産んだ

舎を訪れる児童が増えたことは、学校飼育動物に対する関心の強さ、生き物好きの児童が多いことを証明していると考えます。

(福岡市立飯倉中央小学校)